

## 船舶工兵の話（前段）

荒木 肇

### ■海上輸送群の発足

2024（令和6）年10月29日、1隻の自衛艦が広島県尾道市の造船所で進水式を行い、「にほんばれ」（写真1）と命名されました。全長約80m、排水量は2400ト、喫水3mという小型艦です。艦首にあるナンバ―は4151、灰色の塗色と艦首が両開きのランプドアであることなどは海自の輸送艦と似ています。



写真1：進水した陸自輸送艦「にほんばれ」

しかし、海自艦艇の進水式では海自音楽隊による行進曲「軍艦」が流れるのに、陸自の車両行進曲「陽光を背に」が、陸自中部方面音楽隊の演奏によって流されました。命名も変わっています。海自の輸送艦ならば、その命名は「おおすみ」、「さつま」などの半島の名称のほずです。それが「にほんばれ」とは、どうしたことでしょう。

2018（平成30）年の中期防衛力整備計画で、陸・海・空自の共同部隊、自衛隊海上輸送群（仮称）の創設が決まりました。2025（令和7）年3月、広島県呉に新編される予定です。それを構成する小型艦（LCU）の1隻がこの「にほんばれ」です。2024年11月下旬に進水した排水量3500トの中型艦（LSV）と共に輸送群に編入されます。

将来的には、この群は中型2隻、小型4隻の輸送艦、機動舟艇4隻で2個の海上輸送隊となる予定です。もちろん、それらの部隊へ期待されるのは南西諸島への輸送力の増強でしょう。ただし、運航の主体は陸上自衛官になります。

すでに2019年から、運航要員の教育・訓練については海自江田島

の第1術科学校で、機関要員は同じく横須賀の第2術科学校で行われてきました。職種を問わずという要員選考でしたが、陸自では主に輸送科隊員がこれに充てられています。

有事の海上輸送は、海自の輸送艦、民間資金活用船舶（PFI）や「はくば」や「なつちゃんワールド」や「はくおう」などの民間船舶が担うことになりませんが、今回の陸自が運航の主体となる輸送群の成立は自衛隊史上初めてのことになります。

陸軍が海軍の掩護を受けられない場面では、自前で輸送力を整備するというのは戦前でもありました。

### ■船舶工兵の始まり

日清戦争（1894年）、日露戦争（1904年）の時代には、上陸作戦は沖合に碇泊した輸送船から兵員や資材を木製の馬舟や団平船に移乗させました。まず海軍陸戦隊が敵岸を占領し、その掩護下に150トほどの小型蒸気船で陸岸まで曳航したものでした。陸岸ではこれを切り離し、写真2・3のように陸兵は水兵の指示を受けながら傭人の船頭の操る船や団平船などから上陸していった。

日露戦後には、広島県宇品に陸軍



写真2：日露戦争前の演習  
メガホンを持った水兵の指示で上陸



写真3：日露戦争鴨緑江を渡河する団平船

運輸部が置かれます。それによって近代的な資材や、装備などの補給体制は整いますが、上陸の手段は昔ながらの方法でした。1920（大正9）年には四国の宿毛で上陸演習が行われますが、参謀総長の上原勇作大将から「木舟を鉄舟にせよ」という厳しい指導があったそうです。

それまで運輸部の資材研究は、技術研究本部や技術審査部とは無縁でした。運輸部単独で予算を切り盛りし研究、整備をしていたので、中央部も運輸部の実態が分からなかったようです。新たに鉄舟を装備するということから、翌1921（大正

10）年には特命検閲的な運輸業務検

査が実施されます。

中央からの検査官は錚々たる顔ぶれでした。主座は軍務局長、陸軍省からは軍事課員、参謀本部からも人が出て運輸部業務の要点が理解されました。これ以後、運輸部の研究資材の整備は、陸軍省が計画し推進することとなります。

1925（大正14）年には、陸海軍協同で伊勢湾において上陸演習を行いました。このときには従来の馬舟とはほぼ同型の鉄製平底船に発動機をつけただけで、事故も起きて死者も出てしまいます。

て訓練、資材整備の援助を集中することになりました。まず、第5（広島）、続いて第11（善通寺）、第12（小倉）の3個師団が指定されました。同時に新しい舟艇の建造です。平底舟ではいけないということから、運輸部工務科が担当することになりました。

『日本工兵物語』（原書房、1980年）には貴重な話が載っています。V型鉄製小発動艇といわれる初めての上陸用舟艇の設計・開発は、1年志願兵として鉄道聯隊に入隊し、任官した大阪高等工業造船学科卒の予備役工兵少尉が行いました。もちろん、現役将校ではなく商船学校で教員だったのですが運輸部技師（文官・高等官）に招いたのです。

続いて小発動艇では戦車や砲車を積めない。そこで2つ並列して船首の頭板を倒して棧橋代わりにしようとしています。なかなか苦労があったようですが、艇の頭部断面をW型にして大発動艇が完成しました。

そうになると、大小発動艇を積載して敵岸（泊地）に持って行くのは、普通の輸送船ではできないとなり、運輸部では2層甲板を持つ特殊な母船を必要とすることになります。当時

は陸軍出身の田中義一大将が総理で

### ■新しい舟艇と母船

参謀本部は、特定の師団を指定し

したが、海軍は「八八艦隊」の建造計画を推進していました。陸軍予算はたいへん圧迫を受けていましたが、どうやら陸軍省兵器局も苦勞して、排水量2000トの宇品丸を完成させました。加えて航行中に船尾の水門を開き舟艇を泛水<sup>へんすい</sup>できて、しかも上甲板には航空機を搭載し、カタパルトを装備した靖州丸を建造します。現代でいう強襲揚陸艦といえるでしょう。

### ■船舶工兵の誕生

舟艇操縦は輸送なのだから、操艇要員は輜重兵科だろうという声がありました。それに対して、将来は戦闘的な色彩が濃くなるだろう。やはり工兵がふさわしいという意見が主流になります。騎兵銃を背負い輸卒を指揮するだけの輜重兵より、歩兵銃を持ち、歩兵戦闘もできる工兵が向いているだろうとなりました。1927(昭和2)年のことでした。第5工兵大隊(広島)が運輸部に近く、訓練にも便利ということで、その第3中隊が船舶中隊に指定されました。

ました。ところが、ここに日本陸軍ならではの事情があります。野戦工兵大隊第3中隊は戦時動員計画では、特設師団の工兵大隊を編成するようになっていました。したがって上陸戦闘を行った後には、ふつうの工兵(甲工兵)として活動することになります。甲とは一般の野戦工兵で、築城、渡河、交通などの一般作業を行います。そこで通常の野戦工兵としての教育も行わねばならないということで船舶専門教育は120時間に削減されました。

1932(昭和7)年のことでした。善通寺の11P(第11工兵大隊のこと、陸軍は工兵の兵科記号をPとしました。以後これを使います)、久留米の13Pのそれぞれ第3中隊が丁中隊に指定されます。

### ■工兵部隊の種類

一般工兵が甲、その他に乙、丙、戊、己、辛などと種別がありました。乙は要塞攻撃などの坑道専門で、常設部隊では京都府福知山の10P、茨城県水戸の14Pの各1個中隊です。丙は重架橋、重棧橋などの構築を受け持ちました。大阪府高槻の4P、福岡県久留米の18Pの各1個中隊が担任です。

そして丁工兵といわれたのが敵前上陸、舟艇機動、補給などの上陸作戦専門工兵で、これが後に船舶工兵となります。常設部隊では5P、11P、18Pの各1個中隊でしたが、支那事変以降(昭和12年)には、それぞれ独立工兵聯隊として編成されます。

戊工兵は機力を用い大陸の大河の渡河専門工兵で、後に独立工兵聯隊となりました。己工兵は装甲作業機をもち、ソ連国境陣地突破のために編成された独立工兵第5聯隊のみでした。辛工兵は独立工兵第27聯隊のことで、有線操縦の無人小型装甲作業機を装備し、ソ満国境陣地突破専門です。その他には、電気、作井、測量の各中隊で編成された独立工兵第25聯隊などがありました。

### ■専用舟艇は6種類

1932(昭和7)年頃には各舟艇のシステム化が完成します。兵員揚陸用の小発動艇(軽装歩兵40名搭載)、戦車・重量兵器揚陸用の大発動艇、陸岸砲撃用の装甲艇、高速偵察用の高速艇甲、伝令艇として使われる高速艇乙、指揮艇(写真4)としての特殊発動艇の6種でした。小発動艇にはA、B、Cの各型が

あり、完成型はB型(SBB)といわれます。各型式の識別は艇首に文字が書かれ、番号は製造順でした。「6」18隻で戦闘隊形を整えて敵前上陸をし得る信号・通信装備」が要求され、速力も毎時8キロでした。



写真4：指揮設備をもつ指揮艇  
通称：小発(シヨウハツ)

大発動艇は1927(昭和2)年の訓令に従ったB型(LBB)が生まれます。1930(昭和5)年には船首上部の一部を甲板とした型式に決まりました。全長は約14メートル、自重は8ト、60馬力のガソリンエンジン<sup>ト</sup>を装備し、最大速度は毎時8.8ト(約16キロ)というものです。1932(昭和7)年には89式中戦車(重量11.5ト、幅2.2メートル)



を揚陸するために全長約15<sup>ト</sup>、自重9・5<sup>ト</sup>の大型艇を開発します。なお、戦車の大型化に伴って、特大発動艇といわれるものも生産されました。装甲艇は上陸前に敵陣を制圧するための海の戦車です。回転砲塔を3基装備して、57<sup>ミ</sup>戦車砲を載せたものもありました。全長は16<sup>ト</sup>、自重17・5<sup>ト</sup>、350馬力のジーゼルエンジンで約14<sup>ト</sup>（26<sup>キ</sup>）の高速を誇り、支那事変中は河川警備に、大東亜戦中の南方戦線でも対魚雷艇戦闘でも活躍します。

高速艇甲は英国から輸入した魚雷艇を改装して、敵前上陸直前の偵察用に使われました。国産化し、全長



写真5：北支での陸軍装甲艇

14・4<sup>ト</sup>、自重は5・3<sup>ト</sup>、400馬力のガソリンエンジンで37<sup>ト</sup>（約70<sup>キ</sup>）の高速を発揮します。乙は伝令用で艇首に軽機関銃を載せて150馬力型は最高速16・5<sup>ト</sup>（約30<sup>キ</sup>）です。最後の特殊発動艇は、敵前で大、小発動艇の指揮用のものでした。識別されないように外観は通常の小発動艇と同じですが、艇体はすべて防錆鋼板を使用しました。

### ■初の実戦、上海事変

1932（昭和7）年1月29日、上海では支那陸軍第19路軍が日本海軍上海陸戦隊を攻撃します。支那軍は3万、対して海軍陸戦隊は2000名弱の戦いになりました。開戦と同時に内地から海軍陸戦隊と陸軍混成第24旅団が先遣として軍艦で急行します。同時に金沢の9師団が動員されて、輸送船9隻と7隻の2梯団に分かれて増援されました。

この動員にあたり、広島島の5P第3中隊（丁工兵）を基幹として約100名の臨時派遣工兵隊が編成されます。装甲艇、大発・小発を装備し、9師団の第1梯団は上陸作戦の部署によって乗船部署が決められ、工兵隊も分散乗船しました。被害が集中しないように配慮した分散です。

上海に到着すると、敵前上陸部署は不要になり、9師団主力は上海港に、一部は呉淞<sup>ウソウ</sup>棧橋に上陸できました。しかし、支那軍は上海市内の包囲を解かず、続いて内地では11師団（善通寺・敵前上陸指定師団）、14師団（宇都宮）の動員、派遣があり、上海派遣軍の編制が発令されます。

臨時派遣工兵隊は上海派遣軍司令官の指揮下に入りました。11Pの1個小隊や海軍からの派遣隊員を加えて水上作業隊を編成します。その勢力は3個艇隊（発動艇28隻）を主力としていました。

11師団は内地から戦艦、巡洋艦などで急送され、揚子江下流で喫水の浅い駆逐艦6隻に移乗して敵前上陸予想地点である七了口に向かいます。水上作業隊も、貨物船2隻に小発や隊員を乗せました。クレインの能力不足で搭載ができない装甲艇や大発は、河川用客船2隻で曳航することで七了口に向かいます。

十分な事前偵察を行い2月29日、18・00に6隻の駆逐艦は揚子江口を発進し、翌0200に七了口沖の迫地に投錨しました。同じ頃、水上作業隊は約20隻の舟艇を直ちに泛水し、各駆逐艦に向かい第1次上陸隊

を移乗させます。

05・25、師団長からの発進命令が出されました。岸から1200<sup>ト</sup>の地点から横隊に展開し全速航行に移ります。敵の射撃が始まり、装甲艇も敵機関銃座への射撃で反撃しました。同時に煙幕も展開し、舟艇隊の姿を隠します。

敵前400<sup>ト</sup>、舟艇隊も軽機関銃の射撃を始め、艦隊からの艦砲射撃も開始。しかし、川岸が遠浅のため敵前15<sup>ト</sup>までしか接近できず、舟艇は洲に乗り上げます。直ちに船舶工兵は水中に飛び込み、舟艇を固定しました。艇長は「上陸宜し」の号令をかけ、歩兵は水中に入り上陸を始めます。

06・00、上陸成功。この戦闘での第1次上陸隊の戦死者は2名だけという結果に終わり、鉄の舟艇を使った初めてのの上陸作戦でした。次回は大東亜戦争での船舶工兵の発展、奮戦についてです。

### 参考・引用文献、『日本工兵物語』（吉原矩他・1980年・原書房）、『陸軍船舶戦争』（松原茂生・1996年・戦誌刊行会）他